

---

# 白の魔法使い

ガネガネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の魔法使い

### 【Nコード】

N4325Y

### 【作者名】

ガネガネ

### 【あらすじ】

2×××年、誰もが「魔法」を使用出来るようになった世界。そこに、藤林流矢ふじばやしりゅうやという少年がいた。彼はある「目的」のために、世界でも有数のエリート校、「私立聖十字陽青学園せいじゅうせいがくえん」に入学する。特殊な力を持つ彼はそこで、幼馴染との再会と、たくさんの出会いを重ね、一人の魔法師として、そして一人の人間として大きく成長していく。

流矢の『目的』とは何なのか。彼の力とは。全ては彼と時間によって明かされていく。

これは作者の処女作です。すごく駄文かと思われます。ですが、暇潰し程度に読んでくだされば作者としてはとてもうれしいです。

## プロローグ(戦い)

3月下旬。とある学園で入学試験が行われていた。その学園は世界でも指折りのエリート校で、今年の受験生は千人近くに及んでいた。その中に少年はいた。

黒色の髪に黒色の瞳。身長は170センチ近くで腰には1メートル程な剣。整った顔付きだが、当の本人はそれに気付いていない。その少年は、学園に建てられている直径100メートル、高さ30メートル、観客席の無い3つのアリーナの内、その一つで試験を受ける所だった。

試験といっても筆記試験ではない。この学園の試験にそんな物は存在しない。変わりに行うのは、真剣勝負。勝ったら生き残り、負けたらその場でさよなら。定員が埋まるまで行われるトーナメント戦。『それでわこれより、Bブロック第10試合目をを行います。受験番号523、藤林流矢選手。受験番号327、ビオージオ・サクテイス選手は前へ。』

指示が出されると同時に二人の少年は指定されたラインへ立つ。ライン同士は15メートル離れていて、両者が向き合えるように引かれていた。

『試合開始の前に注意事項の確認をします。本試合ではルール違反と見なした場合、その選手は即失格となります。また、両者が腕に巻いてるリストバンドに外部からの魔力によるダメージを受けたら試合は終了し、ダメージを受けた選手は失格となります。それでは……』

そこで二人は各々の武器を構える。一人は剣を。もう一人はポケットから取り出したカード状のデバイスを変形させ、一丁の銃にする。

『試合、開始?』

始めに動いたのは銃のデバイスを持った少年。

「とつとくたばりなッ?」



相手の足元に直径20メートルの魔法陣を展開させる。黒髪の少年は、間に合わない！と思い、上へ、限界移動距離の10メートルの高さまで飛ぶ。しかし、それは相手の思惑通りだった。1秒で展開された赤色の魔法陣はそこから、高さ25メートル程の火の柱がでてきた。縮地法を空中で使用出来れば問題無いが、彼にはそれが出来ない。完全に詰まらしてしまった。

下からは徐々に火の柱が押し寄せられ、彼自身も重力の働きで下に落ちてゆく。誰もが勝敗が決まったかの様に見えた。

しかし、黒髪の少年には勝機があった。いや、まだまだ余裕だった。彼はボソボソと何か呟くと、火の柱の天辺にそれと同じぐらいの白い魔法陣が展開される。黒髪の少年は、自らの魔力を纏わせ、それに向かって投げつけた。

次の瞬間。カッと、火の柱が光ったと思うと、そこにはもう、火の柱は無かった。

それを見ていた誰もが驚いていた。相手も例外ではない。今度は、相手に隙ができた。

黒髪の少年はそれを見逃さなかった。自分の剣を拾うと、彼はここ一番の魔力を縮地法に使い、50メートル近く離れた相手に2秒で0に詰めた。一瞬の隙を突かれ、反応が遅れた相手に黒髪の少年はまだ魔力を纏わせていた剣で相手の左手に巻かれたリストバンドに当てる。

そこで勝敗が決まった。黒髪の少年の勝利に終わった。

決着が着いてから5分、今まで戦っていた二人はまだ、アリーナの中にいた。理由は一つ。審査員から「待つように」、と言われたからだ。

(何があったんだろう?)

黒髪の少年がそう考えていると.....

『大変長い時間、お待たせしました。両者に御報告があります』  
再び放送が流れた。二人は予想外の展開に戦う前より緊張していた。  
ゴクツ。

黒髪の少年はつばを飲む。

『審査員の話し合いの結果……』

放送から流れたのは、二人が考えもしなかった戦いの結末だった。

## ブログ〜旅立ち〜（前書き）

初めての投稿です。とんでもなく素人ですがよろしくお願ひします。また、アドバイスなどがありましたらよろしくお願ひします。時間がかかるとは思いますが、出来るだけ文章力を向上していきたいと思ひます。

## プロローグ 旅立ち

「流矢、絶つ・・・対に無理はしちゃだめよ!!」

「大丈夫だよ、母さん!! 流矢兄はメチャクチャ強いんだから!!」

「そうよ母さん!!・・・でも、無茶だけは絶対にだめだからね。兄さん」

流矢と呼ばれる少年は彼の家族からそんな言葉をかけられていた。

藤林流矢。それが彼の名前である。身長は170?近く。髪と瞳は

漆黒の様な濃い黒。どちらかという細い体なのに、その腰には1m近くの『剣』がかけられていた。

「分ったから、皆もそんなに心配しないで」

流矢はそう、自分の家族に答える。彼の目の前にいるのは、双子の兄妹、和希

と音葉。そして母親の雪葉。三人は流矢と違い茶色の髪と瞳をしていた。何故なら流矢と彼らは、血のつながりを持っていないからだ。しかし、流矢も雪葉達も、そんな事を気にしていない。むしろ、本当の家族のように接している。だから、家族からの一つ一つの言葉が流矢にとっては、素直に嬉しかった。

ふと、流矢は自分の腕時計を見つめる。午前8時ちょうど。そろそろ出なければ彼の用事に遅れてしまう。

「じゃあ、もう時間だからそろそろ行くね」

「気を付けてね」

「兄さん、ちゃんと毎日、電話で連絡してね？」

「流矢兄、頑張ってる？」

家族からの言葉を背に、彼は自分の家をさる。

4月4日。今日は流矢の学校の入学式。彼は心の内に秘めた『目的』のために新しい日常へと、その身を投じる。そしてそれは、彼の人生を大きく変えた最初の出来事でもあった。



## 主人公設定と『魔法』について

主人公設定

ふじばやしりゅうや  
・藤林流矢

・身長は170cm近く。整った顔つきだが、童顔のため、実年齢より若く見られる事がある。髪と瞳は黒色。父親と母親、双子の兄妹との5人家族だが、流矢だけ、血のつながりは無い。しかし、当の本人達はそれについては気にせず、本当の家族の様に接している。腰には、1m程の『剣』をかけている。

「魔法について」

何百年も前にその力が一般的に証明された。当時は、術式とそれを発動させる呪文キが必要だったが、今ではデバイスを使い、魔力のある者なら誰でも簡単に魔法を使えるようになった。魔力はその強さをSS～Cの六段階に分けられる。流矢はBランクであり、一般レベル。また、魔法は6つの系統に分けられ、魔法師は一人一つの系統しか使えない。まれに、二つ以上の系統を使う事が出来る魔法師もいる。

系統は火・水・風・雷・地・無に分けられる。（流矢の系統についてはまだ秘密。）

「デバイスについて」

術式と呪文をデータ化し、それを保存したもの。術式と呪文は、自分で開発出来るため、デバイスの容量を超えるまで保存する事が可能。魔法を使用する時、魔法名を言うことにより、術式が自動的に展開される。旧式は自分の戦闘スタイルに合った形のものを使っていたが、今の最新型はそれを、コンパクトな形に変換する事が可能になった。そのため、今では旧式を使う魔法師は少なくなった。（

流矢のデバイスについてはまだ秘密。  
)

## 入学式〜再会〜（前書き）

体調不良のため更新が遅れてしまいました。すみませんでした。これからは2日に1回のペースで更新出来ると思いますので、これからもよろしくお願いします。

## 入学式と再会

私立聖十字陽青学園、通称『聖陽』。魔法師の育成を目的とした、世界でも有数のエリート高校である。ここではどの学校でもあまり見ない特徴がある。その1つがこの入学試験だろう。普通の学校は、魔法についての知識を判断するペーパー試験と、受験生の魔力のランク、そして魔法をどれだけ使えるかを判断する実技試験の3つを行う。しかし、聖陽はその3つを行わない。その変わり、トーナメント式の1対1の試合で合否を判定する。それは、受験生の真の実力を見極めるため。

つまり、聖陽学園に合格した人は真のエリート、またはその卵なのである。並大抵の受験生ではここに受かることが出来ない。しかし、戦いには『予想外の出来事』や『例外』が付き物である。流矢もまた、その『例外』の一人であった……。

1-E組。そこが、流矢がこれから1年間過ごす新たなクラスだった。新入生は事前に知されていたクラスで、入学式が始まるまで待機しているよう学園側から連絡があった。流矢は予想以上に早く学園に着いたため、かれこれ20分程自分の席で座っているのだが……。

「（これは……、確実に見られている。いや、別に自意識過剰とかではなく……。」  
見ず知らずの、おそらく自分と同じ新入生であろう、多くの生徒から視線による針の筈攻撃を喰らっていた。それらの視線は、純粹な好奇心のもの、何か疑うかのようなもの、非難的なもの、好意的なもの（これについては、流矢が鈍感なため気付いていない。）など様々だった。流矢は元々目立ちたがりやな性格ではないので、こういったものは大変、居心地が悪かった。

「(多分、俺の試合を見たんだろっなあ……)」  
流矢は今の状態になった理由について2つ、心当たりがあった。毎年、この学園を受験する受験生は1000人近くにおよぶ。試験期間の3日間の内に合格者を決めるため、受験生はA～Eの5つのブロックに分けられる。そして、各5つのブロックで60人、計300人の合格者が決められる。行われる試合の全ては学園内に設置されたアリーナの受験生専用モニタールームで、リアルタイムで見ることが可能である。おそらく、流矢の試合もそこで見られていたのだろう。

「(ま、あの『力』を少し使っちゃたし、あの『力』に対応出来る武器も珍しいから、仕方が無いといえば仕方が無いんだろうけど。それに、『あの』判定で合格したからなあ……)」  
この学園の合格者の決める方法はいたってシンプルで、1つのブロックで60人の勝者がこの学園に入学する権利が与えられる。それが基本的なのだが、1部例外が存在する。例外とは『特別合格者判定』という制度である。

試験の試合には1つずつ、3人の試験監督がつく。試験監督の役目は、受験生が違反(相手を殺す)などをしないかを観察するのが基本的なのだが、実はもう一つの役目がある。それは、「その生徒がこの学園に有能かどうか。」を判断する役目である。試験監督の3人が全員、その生徒が有能と判断した場合、その生徒はその場で合格が決まる。これが『特別合格者判定』である。流矢はその制度で合格したのであった。注目されるのも当然だろう。

「(そういえば、俺の対戦相手、あのままトーナメントに残る事になったけど、どうなったんだろ?)」

ふと、そんな事を考えていると、

「えっと……、ちよつといいかな?」

突然声をかけられた。

「へ?」

突然声をかけられたため流矢は、素っ頓狂な声をだしてしまった。

振り返るとそこには、一人の女の子が申し訳なさそうな顔で流矢の事を見ている。おそらく、流矢が変な声をだしたので驚かしてしまったと思っっているのだろう。

話しかけてきたその子は、肩まで伸ばした茶色の髪に、二重まぶたが特徴的な顔立ちをした子だった。初対面という感じはしなかった。しかし、思い出す事ができない。

「えっと・・・、君は？」

「あつ、もしかして・・・覚えてない、かな？」

少女の顔はさの時一瞬、微かに、だが確実に、悲しみの色を帯びた表情へと変わった。それを見た流矢は、

「えつ、あつ、いや違うんだ？ついこの間まで受験だったから切羽詰まってて、今は記憶が曖昧とううか・・・」

基本流矢の性格は、誰かが困っていたり、悲しい顔をしていたらほっとけない、人の善い性格である。それ原因が自分ならなおの事。

今もその例外ではない。早く目の前の少女について思い出すため、あれこれ言い訳をしながら、記憶の引き出しを端から、片っ端に開けていく。

そこで、一つの思い出が蘇った。

それは、今から5年近く前の事。仲の良かった幼馴染との別れる直前の事。泣かないよう唇を噛み締める自分と、泣きながらも一生懸命笑続けた一人の女の子。

確か、その子の名前は・・・。

「もしかして、君は、美羽？」

そう流矢が聞いた途端、目の前の少女は、パアッと、顔が明るくなつた。それはまるで、夏の太陽の下で咲くヒマワリのような。

雲雀美羽。流矢が小学5年生の頃まで同じクラスだった、いわゆる幼馴染というやつである。小5の2学期の終わり、彼女は家の事情によりイギリスへ転校してしまった。それっきり、お互い連絡を取っていないかった。

「よっ、良かった。憶えてくれてたんだ？」

よほど嬉しかったのだろう。美羽は流矢の両手を握ると、その細い体では想像出来ない強い力で、上下に勢い良く何度も振る。

「ちよつ、ちよつと美羽！振り過ぎ、振り過ぎ？肩が外れる？」

流矢はあまりの痛さにそう叫ぶと、美羽は両手をすぐに離し、バツの悪そうな顔で、

「ごめん、あまりに嬉しかったから……」  
と、謝る。

「ハハハ……。そういう所は変わってないね。それにしても驚いたな。まさか美羽とここで、また会えるなんて」

「それはこつちのセリフ。試験の時は驚いたわよ。たまたまモニタ見てたら、流矢が映っている上、特別合格者判定されているんだもん。ま、流矢の力なら当然かもしれないけど」

「ありがとう。あの時は俺も驚いた。まさかあの判定を、自分が受けるなんて思わなかったからね。ま、何にせよこれからまた同じくラスみたいだし、ヨロシクね！」

「うん、またヨロシク？あつ、そういうばさ……」

久し振りの幼馴染との再会。積もる話もたくさんある。どちらかが口を開けばお互いの話は止まることがない。それは流矢達も同じだった。しかし、それを途中で遮る者が現れた。

二人が家族についてや、新しい友達について話していると、

「お取り込み中のところ悪いんだけど、ちよつといいかな？あ、藤林君に用があるんだけど」

また、流矢は声を掛ける。今度は男子生徒だった。短めの銀色の髪にメガネをかけている。身長は流矢と同じくらいである。知的なイメージを感じさせるその生徒に、流矢と美羽の二人は見覚えがあった。

「あなたはもしかして……」

「試験で俺と戦った……」

「憶えててくれてたんだ。じゃあ、改めて自己紹介するね。僕の名前はビオージオ・サクティス。ビオと呼んでくれ。また会えて嬉し

いよ藤林君。つて、あれ？二人共、何をそんなに驚いているの？」  
ピオと名乗った少年はキョトンとした顔で首を傾げる。しかし、それは仕方のない事だった。なすなら、

「だつてあなた………」

「そんな性格じゃなかったよな……？」

そう、今日の前にいる少年は、試験の時とは全くの別人だったのだ。試験の時、流矢の対戦相手はかなり強かった。だが、それよりも印象的だったのがそのキャラが暴力的な戦闘マニアだったことである。しかし、今流矢達の前にいる少年はその面影すらない。試験の時とは180度違った、真逆の雰囲気を出している。驚かない方が無理な話である。

その事を本人に話すと、

「ああ、その事。実は僕、少し変わっててね。メガネを外しちゃうとああなるんだ。試験ではメガネが壊れないように外してたんだ。

驚かしてゴメン」

そう言うとピオは頭を下げてくる。ますます、試験で戦った同一人物とは考えられなかった。

「いや、別に気にしなくつもいいよ。それよりも、あの後勝ち残る事が出来たんだね。おもつとう。俺は藤林流矢。流矢っ呼んでよ。これからヨロシク」

「私は雲雀美羽。私のことも美羽でいいわよ。ヨロシクね、ピオ」

「こちらこそヨロシク。流矢、美羽」

そう言いながらピオは二人と握手を交わした。

「流矢、頼みがあるんだ」

さっきまで笑っていたピオは、急に真剣な顔つきになった。

「えっ、何？」

「実にかつてな事だと思っただけど、僕を君のライバルにしてくないだろうか？」

「へっ？」

流矢はあまりの突然の申し出に、再び素っ頓狂な声を上げてしまっ

た。だが、すぐに彼はニヤリと嫌味気のない笑みをみせる。

「そんな事か。俺なんかで良ければ喜んで。機会があればまた戦おう、ビオ」

「臨むところさ。その代わりに、次はまけないよ」

そお言いながら、ビオも流矢と同じ様な笑みを浮かべる。

こうして、流矢は2つの再会をはたしたのだった。

## 入学式と出会い

「生徒の皆さんへご連絡をします。後15分で入学式が開かれます。新入生及び、在校生の皆さんは速やかに体育館へ移動してください」  
流矢が美羽とビオとの再会をはたしてから10分後、学園内に入学式の開始を知らせる放送が流れた。

「やっと時間か。美羽、ビオ。俺らもそろそろ行こっか？」

流矢はそう言いながら。席を立つ。それにつられる様に二人も席を立つ。気付けばクラスのほとんどの生徒が体育館へ移動しているところだった。

「そうあえばさ、私達の担任の先生ってどんな人なんだろう？」

廊下を歩いてる最中にそんな事を聞いてきた美羽は、興味津々といった顔で流矢とビオを見ている。よほど気になるらしい。

「そうだな・・・、それは式で発表される事だからまだ何も言えないけど確かに気になるな。ビオはどう思う？」

「そうだね・・・、案外個性的な先生よりも、普通の先生かもしれないね」

「えっつ。それはつまらないよ。やっぱり私は個性的な方がいいな」

そをなたわいの無い会話をしていると、校舎の玄関口についた3人は何やら人混みができているのに気付いた。

人混みは生徒のみでできていた。

「どうかしたんですか？」

流矢は人混みの1番外側に立っていた一人の女子生徒に声をかけてみた。その女子生徒は、美羽の赤色のスカートと違い、緑色のスカートを履いていた。この学園の生徒は学年別に男子はネクタイ、女子はスカートの色が分かれている。青色は3年生を、緑色は2年生を、赤色は1年生である事をしめしている。つまり、流矢の前にいるのは2年生だということだ。

その2年生は困った顔をしながら、

「実は、移動・召喚魔法を応用した空間魔法がかけられているみたいな。別にこういう事は毎年、入学式当時に在校生や先生達の誰かが、が新入生を歓迎するためにするんだけど……」  
「だけど？」

「今回は少しイタズラが過ぎてて、さつきからこの魔法がとかれな  
いの。今もSランクの無系統の生徒が解除魔法をつかっているんだ  
けど、それでも解けなくて……」

その言葉に流矢達3人は驚きを隠せなかった。

ディレベル解除魔法。無系統魔法師なら最初にも誰でも習う初級レベルの魔法で  
ある。無系統のほとん魔法は、物理的ダメージを相手にあたえる  
ものがない。そのアドバンテージを無くすために、何百年も前に開  
発されたのが解除魔法ディレベルだと言われている。効果は対象の魔法を無効  
化にすること。それだけを聞くと、「全ての魔法の中で1番強い  
ではないか。」と思うかもしれない。が、実はそうでもない。この  
魔法にはいくつかの欠点がある。

まず1つ目は、デバイスをもちいても、それを発動するまで5秒  
15秒の時間がかかってしまう事。2つ目は、対象の魔法の効果が  
現れなければ効果がない事。炎で生み出した壁や剣には有効だが、  
爆発や雷撃などの『一瞬で効果が出る魔法』には無効なのである。  
また、それによってできた傷を治すことも出来ない。3つ目は魔力  
の大きさにも比例する点である。魔力Bランクの魔法師がSランク  
の魔法師の魔法を打ち消すのは至難の技だし、逆にSランクの魔法  
師がBランクの魔法師の技を簡単に打ち消してしまう。が、使い方  
次第では戦いの突破口に繋がる事が出来る。

別に今かけられている魔法を解除魔法で打ち消すことは可能である。  
それをSランクの魔法師がやっても出来ない。その事実、流矢と  
ピオの2人だけは啞然としてしまった。

「ちなみに、今かけられている魔法はどんな現象を起こしているん  
ですか？」

驚いている2人とは真逆の、何故か落ち着いている美羽は2年生の女生徒に尋ねる。

「範囲はかなり大きくて、私達のいる校舎全体よ。何でもこの校舎の全ての入り口からでも、また中に戻って来るらしいの。移動魔法を使っても出られなくて。学園内にこんな大掛かりな魔法を使える人はいないから多分、数人の魔法師がこの魔法を発動しているんだとおもっの・・・」

それを聞いた美羽とピオは、

「流矢、ここはあなたの出番よ？」

「そうだよ、君ならこの魔法を解けるかもしれない！」

急にそんな事を言い出してきた。

「ハアツ？お、俺の出番ってなんだよ？なんで俺なら解け・・・あつ、そういう事か」

いきなりの提案に流矢は戸惑う。だが、美羽達が自分に何を求めているのか、すぐに理解出来た。

「でも、Sランクの魔法師がやっても解けない魔法に、俺のが対応出来るか、分からないぞ？」

「いや。君の『あの力』は試験の時、Sランクの僕の魔法に有効だった。やってみなければ分からないさ」

「それにあなたは、困っている人はほっとけない性格でしょ？」

幼馴染と好敵手の言葉を聞いた流矢は、「はあ・・・」と溜息をつく。

「失敗しても、文句はナシだから・・・」

ばやきながら、生徒と達が1番多く集まる玄関口に向かう。その様子をただ見ていた2年生は、

「えっ、えっ？あなた、この魔法を解けるの？」

と、聞いてきた。それに対し流矢は

「いえ。解く事は無理です。でも、ここから出ることは出来るかもしれない」

そう答えると、腰にかけていた剣を抜く。入り口まで来てみるて、

外の景色が不規則に歪み続けていた。おそらく、魔法によって空間を遮断したためだろう。

流矢はそこへ手をかざすと、小さな声で何かを確かにつぶやいた。次の瞬間、彼の剣が白く、明るく光り始め出め、入り口の前に1つの魔法陣が現れた。それを見ていた誰もが息を呑む。流矢はその、白く輝く剣を魔法陣に突き刺す。

ズブリ。

まるで、そんな音が聞こえてきそうだった。そして次の瞬間、入り口が剣と同じ様に輝やいたと思うと、外の景色の歪みが無くなった。流矢の前にいきなり、青色のネクタイをした一人の男子生徒が現れた。おそらく、空間を遮断していた魔法が消えたために、その姿が見えるようになったのだろう。その顔はただただ、驚いているやうだった。

「今のは、君がやったのかい？」男子生徒がそんな事を聞いてくる。「さあ、どうでしょう？」

流矢は相手が上級生にもかかわらず、とぼけた様な感じで答え、美羽達を呼ぶと体育館へと何事も無かったかのように歩いていった。先程まで話していた2年生の女子生徒がその光景をただ、興味深くげに見ていたことにも気づかずには……。

## 入学式と出会い2

現在、午前10時ちよつと前。流矢達は体育館に設置された大量のパイプイスの3つに座っていた。先程の悪戯トランプルから5分近く経つた今では、新入生を含む全生徒900人と先生方が、かなり大きめの体育館に集まっていた。(後に分かった事だが、あの魔法はほとんどの先生方が協力していたらしい。)

生徒達は学年別に座る事になっているので、流矢達と話していた2年生はここにはいない。美羽は、「そういえば、あの先輩の名前聞いてなかった!」と言ってその彼女を見つけようとしたが、2年生が座っている席には、彼女は見当たらなかった。「二人も捜してよ」と催促された流矢達は仕方なく、美羽の手伝いをする。

流矢が彼女を捜そうとあちこちを見ていると、さつき魔法を解いた時玄関口の外側にいた3年生と目が合った。3年生は流矢に向けて、意味あり気な笑みを見せていた。その行為にどう対応せればいいのか分からなかった流矢は、とりあえず誤魔化すために曖昧な笑顔でかえす。

(はあ。力を誤魔化すためとはいえ、あんな素っ気ない態度をとったからなあ。どう接すればいいのかわかんねえ。。。。)

と、そんな事を考えていると。。。。

「隣、よろしいでしょうか?」

また誰かに声を掛けらるた。声の主の方を振り返ると二人の1年生がたっていた。一人は男子、もう一人は女子。声を掛けたのは女子の方らしい。

(わざわざ何で人の許可をつるんだろう?)

そう思いながらも流矢は、「ああ、いいよ」と柔らかな態度で答える。

ありがとう、と頭を下げると女子生徒が流矢の隣、男子生徒がその隣に座る。そこで流矢は初めて、周りの席がほとんどまっ

のに気付いた。入学式では席を1年、2年、3年と分ける事以外指定はされていない。大方、ここに来た頃には二人一続きで座れる所がここしかなかったのだろう。そう推測していると、

「君が噂の藤林君だよな？」

男子がそんな事を聞いてきた。

「そうだけど・・・、噂って大袈裟じゃないかな？」

「何言っているのさ。滅多に出ないあの、『特別合格者判定』で君一人だけが受かったんだ。噂になるに決まっていりじゃないか」

「ははは・・・。ありがとう。ところで君達は？」

「あつ、自己紹介がまだだったね。僕はおほしほ大橋原達也。君と同じクラスだ。苗字が長いから達也って呼んでよ」

「私の名前は北王子理沙きたおうじりなです。私の事も名前で呼んでください。」

「分かった。じゃあ、俺の事も流矢でいいよ。ちなみに俺の左隣にいるのが・・・。」

「幼馴染の美羽よ」

「・・・で、その隣が・・・」

「ビオージオ・サクティスだ。ビオと呼んでくれ」

いつの間に聞いていたのか、二人は流矢よりも早く自分の名前を答える。そんな二人に流矢が苦笑していると

『これより、入学式を始めます。生徒は全員静かにしてください。』

来賓の方々は携帯の電源を切るかマナーモードにし・・・。

そんな放送が体育館に流れた。どうやらやっと、今日のメインが始まるらしい。それまで騒がしかった者もその放送を聞くと同時に口を閉ざす。流矢達もそれにならい一度会話を区切り前を見る。壇上に、陽青の長である学園長が上がっている所だった。

『全員、起立』

放送の指示に従い、体育館内の人間が一斉に立ち上がる。

ようやく入学式が始まるうとしていた。

「ふわああ……」  
入学式が始まって50分近くが経過し、あまりの退屈さに流矢はあくびをする。今は学園長が話しているのだが、これがやたらと長かった。話し始めて40分近くになる。つまらない話は時間が経つにつれ、流矢にとって子守唄に聞こえてきた。いつその事この天国への誘い（ようするに眠気）に身を委ねようか、と思いつながら流矢は目を閉ざそうとすると、隣の美羽に肘で突つかれる。

「（これが終わったあと、次の生徒会長の挨拶で式が終わるから、もう少し我慢なさい。」

「（そうだけど、つまらない話を長々とされたら、どうしても眠くなるじゃんか。これは人間の一つの本能だと思っただが……」

「（何が本能よ。ほら、もう目が覚めたでしょ）」  
そう言われてみると、美羽との会話で、流矢の先程の眠気はいつの間にか飛んでいた。

仕方ない、と思いながら学園長の方へ視線を戻すと、学園長は壇上から降りている所だった。美羽と話している内に、長い子守唄は歌い終えたらしい。再びやる気を取り戻した流矢は、姿勢をただし直す。

『それでは最後に、本校生徒会長から新入生へ挨拶があります』  
そう放送が流れると、壇上に青色のスカートを履いた一人の女子生徒が上がった。小柄だが、整ったプロポーションに整ったルックス。柔らかなそうな雰囲気はどこか、日本の姫君を連想させていた。  
見る者全てを魅力する存在。彼女を見た新入生のほとんどが、彼女に視線を釘付けにしていた。そんな中、流矢、美羽、ピオの三人は周りとは全く別の反応をしていた。ただ驚き、口を開いていた。それは仕方のない事。何故ならばその生徒会長は、入学式の前、玄関口で会った2年生の女子生徒だったのだから。

## 入学式終了

『新入生の皆さん、初めまして。現生徒会長の、3ーA、泡桐あわぎりえ絵里香りかです。一部の新入生はもう、私と会ったよね？玄関口で』  
『そう少女が言つと周りを見渡す。と、そこで流矢達と目が合った。またニコリと笑う。まるで、イタズラが成功した子供の様に。それを見た流矢は驚きを通り越して、やや呆れた顔をする。』

（あの人が生徒会長だったのは凄く驚いたけど、何であの時2年のスカートを履いてたんだ？まさか、これのためなのか？）  
『そんな事を考えながらふと、美羽達を見してみる。どうやら同じ様な事を考えていたらしく、美羽とビオも流矢と同じ様な顔をしていた。』

それから20分程が過ぎた。生徒会長、絵里香の挨拶は学園長の話よりは短かったものの、そこそ長かった。が、話の中で、これから行われる行事や学園についてなど、新入生の目を引くような情報を時折混ぜている為、退屈にならないですんだ。そのため流矢は、絵里香が話し始めてからまだ一度、眠気がきていない。

『少し時間がオーバーしてしまいました。これで挨拶を終わります。』

絵里香がそう言うと、流矢は心の中で、

（はあ〜。やっとこれで式が終わるよ。きつかった・・・）

と言いながら自分の腕時計をみる。短い針が12の数字を指そうと  
していた。この後、生徒は各教室に戻り、30分程ホームルームHRをした後下校となっている。流矢は、家から学校まで距離がある為、学校の寮でこれから3年間暮らす事になっている。

（寮って3人部屋なんだよな。誰と同じ部屋になるんだろう。楽しみだな〜）

まだ式が終わっていないのに流矢が少々浮かれていると、まだ壇上から降りていない絵里香はとんでもないことを言い出した。

『最後に、急な変更ですがこれから、1-E藤林流矢君に代表として、新入生の抱負を語ってもらおうと思います』

.....

「なつ、ナニーーーッ？」

数秒の静寂の中、一番にそう叫んだのは勿論、いきなりご指名を受けた流矢である。流矢自身は学校側から、抱負について全然聞いていない。それは他の生徒も同じである。おそらく本当に急な変更だったのだろう。だが、流矢が1番驚いたのはそこではなく、自分が指名された事である。

「ちよつ、ちよつと待つてください？えっ、え？何ですかこれはドツキリですか新入生いびりですか？てか、俺の意思は無視ですか？」

『はい、無視です』

音速の返答。ニコつと再び見せる生徒会長の笑みは、流矢には悪魔の笑みにしか見えない。しかも何か彼女の後ろに、ドス黒いオーラのような物が見える。言われなくても、それが何を意味するのか、彼には分かる。『早く来い』と言っている事を。

「りゅ、流矢。早く行った方がいいよ.....」

「僕もそれがいいと思う。何か会長さんの後ろから、黒いオーラが見えるし.....」

左を向くと、彼の幼馴染とライバルが流矢の身の危険を感じたのか、怯えながら心配そうにこちらを見ている。

「私もそう思います。あの人が悪魔に見えてきました」

右では理沙が、美羽達と同じ事を言っている。しかし、その顔は、今の状況を面白がっているのかニコニコと笑っていた。

こっちの方がよっぽど悪魔である。

その隣では達也が、何も言っていないが下を向いて、「くっ、くっ.....！」と笑いを堪えていた。

『こいつ等は後で地獄を見せてやるっ』と流矢が固い決心をたてる

とふと、別の視線を感じた。顔を上げてみると体育館内の人間が全員、流矢を見ている。中には流矢に同情している人もいたが、ほとんどは『行け』っと目線で訴えている。

どうやら助け舟を出してくれる人はいないらしい。

「ハア」……………」

流矢はこの世の終わりの様な溜息をつくとき、静かに席を立つ。もう、どんなに反論しても無理だろう。とりあえず、今やるべき事は……………」

（何を話せばいいんだろう？）

話の内容を考える事だ。

「あー、緊張した……………」話している内に何喋ってるのか分からなくなつたから、内容グチャグチャだったかもなあ……………」

「いやいや中々の名演説だったと思うよ。是非とも参考にさせてもらうよ。」

「全くそのとうりだ。今度また機会があったら同じ話をしないか？次は学校関係者以外の前で」

「あつ、それ面白そうね」

「ええ。流矢君是非、そうしてください」

「美羽とビオはともく、達也と理沙はまだ叩かれないのか？てか、面白そうってなんだよーか理沙 teme エちゃっかりお願いしてんじやねえツ？是非ってなんだよ、是非って？」

流矢の一世一代の演説も無事にすみ、入学式を終えた流矢達は、H R 前の休み時間を談笑して過ごしていた。（ちなみに入学式を終えた直後流矢は、達也と理沙の二人をハリセンでぶっ叩き、しっかり

お仕置きをしていた。ハリセンをどこから出したのかは謎。四次元ポケット所持の疑惑あり)

入学式直後の数カ月、席順は自分達で決めていらしく、流矢は真ん中の列の最後尾の席に座っていた。他のメンバーは、ピオは流矢のすぐ前に、美羽は流矢の左、理沙は右に、達也は理沙の前の席に座った。

「そう言えば、理沙と達也は元々知り合いなのか？式の時は二人で俺に話し掛けてきたけど？」

「いや、お互い今日知り合ったばかりだ」

「へっ？そうなのか？」

予想外の返答に流矢は、少し間抜けな声ができる。

「ええ。たまたま同じバスに乗り合わせて、その時達也さんが隣の席に座るよう促してくれて……」

「んで、話してみたらお互い同じ雷の系統のを知って、そのまま意気投合ってわけだ」

「そういう事です。そういえば私達、まだ流矢さん達の系統を教えてもらっていませんでしたね」

「そういえばそうだな。俺はピオの系統は知っているけど、美羽とは魔法を教わる前に別れたから分からないな。」

「そうなんだ。あつ、ちなみに僕の系統は火だ。美羽は？」

「私は風。流矢は？」

「俺か？実はな……、分からないんだ。」

流矢の言葉に、他の4人の頭の上にハテナマークが浮かぶ。

「分からないって。流矢それ、どういう事？」

「魔力光で分かるだろ？」

達也の言う『魔力光』とは、魔法発動時に展開される魔法陣から発せられる光の事である。魔力光は系統により分かれている。火は赤色、水は青色、風は緑色、地は茶色、雷は黄色、無は灰色である。だが、流矢は……

「美羽とピオは見ただろ？玄関口で俺が魔法を発動した時に展開さ

れた魔法陣を……」

その言葉に二人はその時の事を思い出す。

「そういえばあの時……」

「流矢の魔法陣は確か『白色』に光って……。ツ？ちよつと待つてくれ！白色？」

ピオは大声で叫ぶ。当然だ。この世界に白の魔力光は存在しない。

「んなバカな……」

「そんな事、あり得ません！……でも、実際にそれを出す流矢さんがここにいる……。あれ？魔力光が存在しないものであれば、その系統も存在しない事になります。なのに流矢は魔法が使えている。流矢さんの使っている魔法は一体？」

「それについてなんだが……」

「みんな席について。HR始まるわよ！」

クラスの女子が廊下を見ながらそう言っていた。確かに時計を見てみると、休み時間が後数十秒で終わろうとしていた。

「悪い、話の続けは放課後にさせてくれ。その時に全部話すよ」

「仕方ないわね」

「絶対だかな！」

達也がそう言うと、それを合図に流矢以外のメンバーは前を向いた。その直後、タイミングを見計らったように、教室に一人の人物が入って来た。

それを見てクラス内の生徒は、あまりに驚いて目を見開き、ピオはその人物を見るなり頭を抱えてしまっていた。

教室に入って来たのは、この世の物とは思えない、絶世の美女だったのだ。

「それでは皆さん、これからHRを始めます」

生徒達（ピオは別）があまりの美貌に声を失い、静まり返った教室で、担任であろうその女性だけが口を開いた。

## 恐怖(?)の先生(母親)

「それでは皆さん、これよりHRを始めます」

そう言ったのは、おそらく流矢のクラスの担任の先生であろう一人の女性。フワフワな金髪で瞳は鮮やかなサファイアブルー。少し高めの身長に細い体。いわゆる西洋美人といった感じのその女性は、生徒会長の絵里香とは比べ物にならないぐらいの絶大なオーラを放っていた。クラスの誰もがその美しさに見とれていた。一人を除けば……

「んっ？ビオ、どうかしたのか？なんか震えているけど……」  
すぐ後ろのため、流矢はビオの変化にいち早く気づいたため、ビオに話し掛けてみる。しかし、体が小刻みに震えさせているビオは何の反応もせず、「さ、最悪だ……。何でよりにもよってあの人が……。」「と、ただブツブツと呟いているだけだった。  
「なんだお前。あの人の事知ってるのか？すみにおけん」と、言おうとしたが言えなかった。ビオの顔が異常な程に青ざめていたのだ。

(な、何があつたんだ……?)

ビオのあまりの変わり様に流矢は、得体の知れない恐怖を覚える。そんな流矢達に、教卓の前に立つ女性は少しも気付かず自己紹介を始めるようとしていた。

「私が今日から1年、皆さんの担任を受け持つことになりました、ルミナ・サクテイスです。よろしく願います」

ルミナと名乗ったその女性はまた、ニコリと微笑む。

(……ん？サクテイス?)

流矢はそこで、何かが喉に引っかかった様な違和感を覚える。『サクテイス』。どこかで聞いた気が……。それは流矢だけではなく、クラスの何人かも流矢と同じ事を考えていた。そして、その疑問を解くかの様に、ベストなタイミングでルミナと名乗る女性は

ある事を言った。それは、

「ちなみに、このクラスにいるビオージオ君の母です」

.....、

「えっ、エーリーツ？」

クラスの生徒は一齐に仲良く絶叫する。対してビオはそれを聞くと、ミジンコのように縮こまってしまった。よっぽど知られたくなかったらしい。しかもさっきよりもさらに、体が震えていた。しかしそんな事よりも、今彼らの目の前にいる女性が母と呼ばれるような年齢だったという、驚愕の事実である。彼らの目の前に映る人は明らかに、15歳の子供の母親とは言ってはいけない、若さを感じさせる美貌だった。

（あれ？でも俺の母さんも似たようなものだよな。確かあの人、40代だったよな。見た目は20代だけど.....）

周りが啞然としている中、身近な人物を思い浮かべ、流矢はなんとか落ち着く事が出来た。今だに震えているビオに、彼女がどんな人物なのか聞こうとしたが、まだルミナが話しているし、もうすぐ終わりそうだったので後に聞く事にした。

「それでは今日のHRはこれで終わります。今後の学校行事の詳しい予定や学級委員長決めは明日にします。寮生の生徒は夕方4時に寮の説明会があるので、しっかり行ってくださいね。それじゃあ、私はこの後職員会議があるので、もう行きますね。皆さん、また明日」

そう言うトルミナは、とつとと出て行ってしまふ。それを見て生徒（主に男子）は「さよ〜なら〜」と彼女を見送る（手振り付きで）。そしてすぐに、周りの生徒と談笑を始めたり、帰りの支度をしたりするなど各々の行動をとりだした。流矢はとりあえず、いまだに唸り続けているビオに再び話し掛けてみる。

「ビオ、何をそんなに怖がってるんだ？」

「最悪だ最悪だ最悪ださい.....」

「おいビオ、ビオー！」

「何で、何であの人が（ブツブツブツ……）」

「しつかりしろ、ビオ！……ビオージオ・サクテイス？！？」

「ワアツ？」

驚いたのか、ビオは勢いよく顔を上げたかと思えば、その反動で後ろに椅子ごと仰け反り、そのまま倒れる事が出来れば受身を取る事が出来たかもしれないが、流矢の机の角に思いつ切り頭を打ち付けてからズルズルと、再び椅子ごと倒れるという何とも無様なコメディーっぷりを披露した。

「お、おい。大丈夫か？」

達也はビオの顔を心配そうな顔で覗き込む。流矢達も同じ様に覗き込んだ。対してビオは、「大丈夫……」と言いながらゆっくりと椅子を立てて座り直す。

「幸い、コブは出来ていないみたいだ。今ので頭もスッキリした」頭をさすりながらビオは少し恥ずかしいそうに笑う。さっきの取り乱しといい、今のコケっぷりといい、人なら誰でも見られたくないものだ。

「まあ、怪我が無くてなによりだ。ところで、あの先生……お前のお母さんってどんな人なんだ？」

流矢はようやく、ビオに聞きたかった事を口にする。

「あつ、それ俺も聞きたかったんだ。先生が話してる時、お前ずつと尋常じゃない震え方してたもんな」

「まあ。そうなんですか？」

「ビオ、あなた一体何があったの？」

流矢に続き、達也達も次々とビオに質問攻めを喰らわしていく。

「うっ……、やっぱりそれを聞くんだね」

ビオは顔を少し引きつらせると一度、「ハア……」と深い溜息をつき、

「別に、悪い人ではないんだ。むしろ、本当に良い母親だと僕は思うよ。ただ……」

「ただ、なに？」

「その、教育方針というか……、勉強の教え方や魔法の特訓が厳しいんだよ……」

「え、具体的にどんな所が厳しいんですか？」

理沙が興味津々と言った感じでビオを見つめる。流矢達も同じ様な顔でビオを見る。

「えっと……、例えばみんなは『九九』を習ったよね？僕も小2年の時に覚えさせられたんだけど、僕が一つでも間違えると『罰』があつたんだ」

「あ？罰？そんなの俺でもあつたぜ。1・2度間違えても何もなかったけど、3度目からは腕立てを30回させられたんだ。いやー、あの時はよく耐えたと思うよ。1000回はしたんじゃないかな」  
達也は腕を組み、自分の功績を誇らしそうな顔をして語る。

「達也、そこは威張るトコなのか？腕立て1000回もクリアしたってことは、『九九』覚えるのに300回くらい間違えた事になるからな」

流矢は達也の組んだ腕をほどかせながら、やや呆れ気味の顔をして言う。

「はあ……。まあ、達也の阿保な話はおいとくとして。ビオ、あなたは一体どんな罰があつたの？」

「戦闘の実践訓練だったんだ。しかも、相手は母さんで歯が立たないぐらい強くてさ。その上全く、手加減してくれなくて……」

「えっ、ビオさんのお母様は、そんなに強いですか？」

「結婚する前は、北欧最強の軍隊『ヴァルキリー』の、隊長を務めていたらしい。当時は24歳……」

ビオの言葉に全員が啞然とする。彼の母親を知らなくても、『ヴァルキリー』がどんな軍隊なのか、その隊長がどんな人物なのか。それらを噂程度には聞いていたからだ。

「確か、『ヴァルキリー』の隊長ってその戦う姿から、『戦乙女』

じゃなくて『鬼神』って言われてたんだろ？」

「今でもそうさ。あの人を怒らせた時には、命がいくつあっても足りないよ……」

「そんな、大袈裟ですよ……」

「でも、ビオの話の話を聞く限りじゃ、最初に見た時の先生のイメージが思いっ切り変わったな」

達也の言葉に、流矢達は大きく頷き、それを見たビオは苦笑する。

「あははは……。まあ、実の息子の僕が言わせてもらうと、半分優しく、もう半分は鬼ばばだね」

ビオは本人のいない事をいい事に、自分の母親ミナに対して少し悪態をつく。

そして

「あら〜。ビオージオ君、高1にもなつて人に、それも先生に対して陰口を言うなんて礼儀がなつていませんね〜。私が今ここでその腐った根性を叩き直して上げましょう」

流矢達の耳に入って来たのは一人の女性の声。その場に、先ほどはいなかった人物の声。聞き覚えのある、ビオにとってはこの場に居てはならない人物の声。

その声の主はビオの後ろに立っていた。

ギギギギ……

まるで、サビたせいで開きずらくなつた扉を開いた音が聞こえてくる様に、ビオは首を後ろに回す。

そこに立っている人物が視界に入ったビオは顔を真っ青にしながら、「か、母さん……?」

恐怖の混じつた声でそう呟く。しかし、その相手はそれを肯定せず、「いいえ。私はあなたの母親ではなく、あなたを正しい魔術師に導く教師、『ミナ・サクティス』です。よって、あなたが自分の母親に対して『鬼ばば』呼ばわりした罰をお仕置きで償って貰います。」

「ちよつて待つた? あんたが今怒つてり理由つて、自分を『鬼ばば』って言われたから?」

「そんな事はありません。教師が私情を挟んで生徒に教育をしていい筈がありません」

「……鬼ばば」

「さてと、今日は入学式だからアリーナも使われていないでしょうし、たつぷりとお仕置きが出来ます。ええ、大丈夫です。お仕置きといつても30分程度の模擬戦ですから。ですが、『鬼ばば』と言った事を後悔しなさい」

「やっぱり私情をバリバリ挟みまくってじゃん？教師としてあるまじき事なんじゃねえのかよ？」

「つべこべ言わず早く来い。そして逝け」

「あんた今、実の息子に向かって『逝け』って言っただろ？つてやめて、関節技を決めないで？僕の腕はそんな方向に曲がらないから？」

腕をあらぬ方向へ曲げられ、叫び続けるピオはそのままルミナに連行されていった。流矢達は彼を助けようにもルミナのあまりの気迫に気圧され、その場から動く事も出来なかった。いや、それもあるのだが、彼らが何の行動も起こせなかったのは、自分達の見たルミナの間像があまりにも違っていたからだ。最初のイメージは、清楚でグラマーで、美人で優しそうな先生。しかし今では、元北欧最強の軍隊の隊長。メチャクチャ怖くて怖い。そして、自分の実年齢を悪くいいならば容赦無く、実の息子でもお仕置きをするとしても人間。

そんな彼女とその息子の徐々に遠ざかっていく後ろ姿を見ながら、  
「まあ……とりあえず、あの人に『鬼ばば』は禁句だって事は分かったな」

「年齢気にするような容姿か？ウチの母さんよりピチピチじゃねえか」

「達也。女の人って、色々複雑なのよ……」

流矢はこの学園で無駄死にしないための知識を得て、達也はルミナのあるそこまで怒る理由が今だ分からず、同じ女である美和はそれを

悟る。そして理沙はというと、

「とりあえず、私はお腹がペコペコなのでピオさんを置いて早く食堂に行きませんか？」

空腹を満たすため、親友<sup>ピオ</sup>を待たず、見捨てる事を提案したという。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4325y/>

---

白の魔法使い

2011年12月27日00時19分発行